

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32652
 研究種目：基盤研究(A)
 研究期間：2008～2011
 課題番号：20251005
 研究課題名（和文） 台湾人の口述歴史の採集分析に基づく日本統治から戦後への台湾社会の
 転換に関する研究
 研究課題名（英文） The transfiguration of Taiwan society from Japanese period to the
 postwar period
 研究代表者
 栗原 純（KURIHARA JUN）
 東京女子大学・現代教養学部・教授
 研究者番号：40225264

研究成果の概要（和文）：日本統治期から戦後の中華民国期の転換期における台湾社会の変容について、日本統治時代に日本語教育を受けた世代を中心に口述歴史の方法に基づいて研究した。この時期は、文献史料が大変限られており、研究が困難な時期であるが、それを補うことを意図した。調査の対象者には、植民地において医学部などの高等教育を受けた方、戦時中は上海に在住し戦後台湾に帰還した方、兵士として太平洋の孤島に赴いた方、台湾総督府の高官、あるいは戦後の政治的弾圧の被害者、マラリアなど伝染病対策の責任者などが含まれ、その結果、歴史研究に資する証言が多く得られた。

研究成果の概要（英文）：We used an oral history methodology to research social changes in Taiwan over the years from the period of Japanese rule through to the end of the postwar period. The persons surveyed were mostly from the elderly generation who had been schooled in the Japanese language when young. We interviewed a variety of people, such as medical doctors, former conscripted soldiers, high-ranked officers of the Governor-General, participants of national movements and others.

Taiwan society lived through turbulent times through the war and postwar period and emerged from those decades with few historical materials intact. Fortunately, valuable testimony for historical study was obtained through this interview-based research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	8,900,000	2,670,000	11,570,000
2009年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2010年度	7,500,000	2,250,000	9,750,000
2011年度	8,000,000	2,400,000	10,400,000
年度			
総計	32,200,000	9,660,000	41,860,000

研究分野：歴史学（台湾口述歴史研究）

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：口述歴史、日本統治、台湾社会の変容、植民地、日本語世代、白色恐怖

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦時中から戦後にかけての台湾社会の変容については、文献史料が大変限られている。19

45年8月15日、日本の敗戦により台湾の植民地統治は終わりを告げるが、大陸の中華民国政府から派遣された新政府による台湾接収が行われ

たのは10月25日のことであり、それまで、台湾では総督府による統治が継続していた。そのため、この期間に日本統治時代の貴重な文献史料、特に戦時中の史料が大量に処分されたといわれている。日本統治時代の公的な史料は、台湾総督府の公文書をはじめ、比較的まとまって残されていることが知られており、現在では公開もされているが、その総督府文書においても戦時中の部分はほとんど存在しない。また、公文書のなかでも、ことに、軍事関係の史料は現在にいたるまで、全く、その所在が不明である。

その原因の一つとしては、戦時中のアメリカ軍による空襲により総督府の建物自体が一部焼失した際に失われたことなども考えられるが、上記期間に日本側により廃棄、あるいは処分された可能性が大きいと思われる。

戦後、大陸においては、抗日戦争中は統一戦線を維持してきた国民党と共産党勢力との間の対立が表面化し、ついに内戦が勃発した。その結果、アメリカの軍事的・経済的援助を受けて有利と見なされていた国民党側が劣勢となり、1949年10月には、共産党の毛沢東を国家主席とする中華人民共和国が北京で成立を宣言した。大陸における内戦に敗れた蒋介石は、同年末、中華民国の首都を南京から台北に「遷都」して、大陸の中華人民共和国と台湾海峡をはさんで対峙するという事態が生じた。その翌年、朝鮮戦争が勃発し、アメリカを中心とする国連軍と中華人民共和国の派遣した「義勇軍」が直接対戦する状況のなかで、アメリカ政府は海軍を派遣して台湾海峡を封鎖したため、台湾に蒋介石の中華民国政府が存続することとなった。

国民党＝中華民国政府は、1949年、台湾に戒厳令を施行し、共産党や反政府勢力の徹底した弾圧、すなわち白色テロを長期間にわたって実施したため、台湾の住民は沈黙を余儀なくされた。台湾では、蒋介石は大陸における抗日戦争の英雄として君臨したため、戒厳令のもとで日本統治時代から個人が所有していた史料、特に日本語の文献は処分せざるをえない事情が存在した。

台湾において、戒厳令が解除されたのは、1987年のことであり、約40年にわたる長期の間、言論の自由は失われ、日本時代や戦争直後の時代について語ることはタブーであり、台湾史研究も困難であった。

以上のような歴史的経緯から、日本統治時期、とくに戦争期の文献史料は公的文書は勿論、個人的な史料も多くが失われ、歴史研究にも重大な支障を生じてしまった。

(2) 上述したように、台湾において言論の自由が実現し、台湾史研究が開始されるのは、戒厳令の解除された1987年以降を待たなければならなかった。以後、政治的な民主化が進むと共に、台湾史に対する関心も高まり、歴史の掘り起こし、史料の発見、公開が進められてきたが、戦争期から戦後にかけての文献史料は極めて限られてい

る。そのため、この史料が空白の時期については、当時の事情を知る世代からの直接的な聞き書きが不可欠である。しかし、その世代の方々も高齢化してきており、体験談を聞くことができる時間は限られている。日本統治時代を生きてこられた世代、日本語の世代に対する調査・研究は、現在が最後の機会といえるであろう。

このため、本科研では、この世代からの聞き書きという方法により、日本統治時代から戦後の台湾社会の変容について、教育史・女性史・原住民史などの分野について関係者から歴史的証言を得ることを課題とした。

2. 研究の目的

(1) 背景で触れたように、文献史料の特に欠落している時期について、当時を体験した世代の方達からの証言を多く採集して、史料の空白を埋め、歴史研究に資すること。

(2) そのために特に日本語教育を受けた世代を対象として戦時中の生活に則した事実、日本人と台湾人の戦時中の関係、また、大陸から渡来した新政権の政策や、台湾の人々の新政権の受け止め方、引き揚げる日本人との関係など、戦後の激動期についての体験的証言などを少しでも多く採集して、記録に残すことを目的とした。

3. 研究の方法

文献史料の限られている時期を対象としてきた本科研の開始以来、文献史料を補う為に、研究会と聞き書きという二つの活動を中心に進めてきた。研究会の内容は従来の研究業績の学習である。この点については、オーラルヒストリー、聞き書きという方法に依る研究を続けてこられた先学から学ぶことを掲げて、研究会を継続してきた。

また、もう一つの活動は、大学の休暇を利用して、台湾現地を訪問し、台湾の日本語世代の方に対する訪問、聞き書きである。本科研の参加者はその専門分野に応じて、教育史、そのなかでも台北帝国大学の関係者、あるいは初等教育機関である公学校の関係者などに分かれて訪問を重ね、その録音を集めてきた。

また、戦後台湾における医療政策、伝染病対策、医学教育の専門からの聞き書きや、ハンセン病治療の専門家からの聞き書きなども実施された。あるいは、戦後台湾を代表する詩人、自らの従軍体験を小説にまとめられた文学者からの聞き書きなどからは、日本語と中国語の両言語をもちいた文学活動について貴重な証言が得られた。

このようにして集められた録音の記録は、文字化を専門的仕事するグループによって、その都度文字化してきたが、その際、聞き書きの内容に登場した台湾の人名・地名、歴史的用語な

どはデータベースとして蓄積してきた。

4. 研究成果

3の研究方法で述べたように、本科研が蓄積してきた録音の記録は、専門的集団により次々と文字化、その成果を刊行してきた。現在まで、台湾オーラルヒストリー研究会の編集により『台湾口述歴史研究』として全7冊が刊行されている。

これらには、上述の研究会の記録と訪問の記録が含まれており、また、本科研の途中において中間報告の場として2008年7月、三日間にわたり実施された、国際研究集会「台湾社会の変容と口述歴史 - 思い出が紡ぎ出す歴史を探る -」の報告も第3集・第4集として刊行した。東京女子大学で開催された同シンポジウムには、台湾からは経済史・教育史・法律史・交通史などの分野を専門とする研究者が参加し、日本からも衛生・文学・原住民・女性史などに関する聞き書きの成果が報告された。

その他、本科研に参加した研究者による研究論文も多数発表されている。それらは、文献史料に基づく日本統治期の研究であっても、多くの日本語世代の口述から得た知見が文献史料の解釈、購読に生かされている。特に、史料に登場する歴史上の人物を直接知る世代からその人柄、あるいは人間関係などの情報を多く得ることができた。このように知見もまた研究成果といえるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

栗原純 「上海における「国際阿片調査委員会」と日本のアヘン政策 - 台湾総督府のアヘン専売制度を中心として - 」慶應義塾福沢研究センター『近代日本研究』28 pp3-55 2012年 査読なし。

栗原純 「台湾総督府の阿片専売政策 - 明治三四年の扶鸞「降筆会」運動の意味するもの - 」『第六屆 台湾総督府檔案学術研討会論文集』pp79-134、2011年、査読あり。

中田敏夫 「国語の同化政策とその影響に関する調査研究 - 植民地台湾での台湾人のアイデンティティ形成 - 」『附属学校外国人児童生徒受け入れ調査事業の報告書』2 pp1-67 2011年、査読なし。

中田敏夫 「寥継思著『徳聡の履歴書』 - 清国人・日本人・中華民国人だった一人の台湾人の履歴書より」『国語国文学報』69 pp13-38 2011年、査読なし。

松永正義 「台湾における魯迅」『言語社会』4 pp110-122 2010年、査読なし。

栗原純 「統治初期における台湾総督府の旧慣調査と土地政策 南部地方を中心として」『台湾学研究国際学術研討会 殖民地与近代化 論文集』pp41-107 2009年、査読あり。

栗原純 「日本統治下台湾における旧慣尊重と同化政策 - 戸口調査簿における女性の姓と改姓名 - 」『東京女子大学 史論』61 pp47-67 2008年、査読なし。

中田敏夫 「植民地教科書と国定教科書 気になるコトバ民度」『植民地教育史研年報』11 pp194-197 2008年 査読なし。

松田京子 「植民地支配下の台湾原住民をめぐる「分類」の思考と統治実践」『歴史学研究』846 pp99-107 2008年、査読あり。

[学会発表](計2件)

栗原純 「台南と台湾総督府の塩業政策について - 塩専売制度の廃止と施行 - 」国立成功大学主催「海洋古都 府城文明之形塑」2010年 11月20日。

栗原純 「台湾総督府の阿片政策 - 明治三四年の扶鸞「降筆会」運動の意味するもの - 」国史館台湾文献館主催「第六屆 台湾総督府檔案研討会」2010年8月26日。

[図書](計10件)

台湾オーラルヒストリー研究会『台湾口述歴史研究』
第7集 松永正義・丸川哲史「日本敗戦前後の台湾の言語事情および大陸との関係」
白柳弘幸「玉川大学教育博物館・台湾教育史現地調査について」2012年、pp92。

台湾オーラルヒストリー研究会『台湾口述歴史研究』
第6集 恩河尚「戦後沖縄の引き上げのインタビュー」2010年、pp134。
宮田節子「朝鮮総督府関係者の録音記録とその文章化」
倉沢愛子「インドネシアの元南方特別留学生へり聞き取りと出版の体験」

台湾オーラルヒストリー研究会『台湾口述歴史研究』
第5集 「王萬居オーラルヒストリー」2012年、pp90。

台湾オーラルヒストリー研究会『台湾口述歴史研究』
第4集 国際研究集会「台湾社会の変容と口述歴

史 - 思い出が紡ぎ出す歴史を探る - 」(下) 2011年、pp111。

所澤潤 (監訳) 呉文星 『台湾の社会的リーダー階層と日本統治』財団法人交流協会、2010年 pp566。

丸川哲史 『台湾ナショナリズム 東アジア近代のアポリア』講談社、2010年、pp222。

松金公正 「台湾故宮における「中華」の内化に関する一考察」植野弘子・三尾裕子編 『台湾における 植民地 経験』風響社、2010年、pp55-98。

台湾オーラルヒストリー研究会 『台湾口述歴史研究』
第3集 国際研究集会「台湾社会の変容と口述歴史 - 思い出が紡ぎ出す歴史を探る - 」(上) 2010年、pp83。

台湾オーラルヒストリー研究会 『台湾口述歴史研究』
第2集 古家信平「タンキーの判示に見られるライフヒストリー研究の可能性」
弘谷多喜夫「私のオーラルヒストリー体験と聞き取りの可能性」2010年、pp86。

台湾オーラルヒストリー研究会 『台湾口述歴史研究』
第1集 所澤潤「台湾でのオーラルヒストリー採集の技術を考える」2009年 pp48。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗原 純 (Kurihara Jun)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：4 0 2 2 5 2 6 4

(2) 研究分担者

所澤 潤 (Shozawa Jun)
群馬大学・教育学研究科・教授
研究者番号：0 0 2 3 5 7 2 2

(3) 連携研究者

中田 敏夫 (Nakada Toshio)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：6 0 1 4 5 6 4 6

松永 正義 (Matsunaga Masayoshi)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：5 0 1 9 0 4 8 4

木下 尚子 (Kinoshita Naoko)
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：7 0 1 6 9 9 1 0

松田 京子 (Matsuda Kyoko)
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：2 0 2 8 3 7 0 7

丸川 哲史 (Marukawa Satoshi)
明治大学・政治経済学部・教授
研究者番号：5 0 3 3 7 9 0 3

松金 公正 (Matsukane Kimimasa)
宇都宮大学・国際学部・准教授
研究者番号：5 0 3 3 4 0 7 4